

WHAT'S YOUR "DO."?

#2593 / 今村久美
被災地の子どもたちが
震災の経験を強さに
変えていけるよう、
応援し続ける



まず、今できるのは震災という悲しい体験をこれから生きていく強さに変えることの手助けだ。その手助けは、地域に根差し、継続していきはじめて価値のあるものになる。「被災地の子どもたちが違う場所に住む子どもたちと出会い、学び、新しいプロジェクトをつくるような企画もいつか実現したい」と今村氏。もともと水産加工や原子力発電など限られた産業しかなかった女川町で、外部の人間がどのように教育に関わり、子どもたちの将来をサポートしていけるか？ それを模索しながら、今村氏は「DO宣言」の実現に邁進中だ。

学校の「カタリバ」



先生が黒板の前で指導するのとはまったく異なるカタリバの授業風景。このメソッドは、教師陣の育成や企業での研修にも活用されるようになってきている。

被災地の

「コラボ・スクール」



photos by yasuko furukawa

居場所のない子どもたちに、自主的に学習する場を提供し、成績が上がって楽しくなってきたという喜びも、ターゲットの生徒のうれしい言葉も。

居場所がない子どもたちに自ら取り組める学習の場を

コラボ・スクールは被災し失業していた学習塾講師を先生として採用し、教育委員会・学校・地域の人々の協力のもとで運営されている。子どもたちは教室で仲間と語り合い、一緒に学習し、時には先生に質問することもできる。しかし、先生の数はどうしても足りない。そこで活用されているのがタブレットだ。

「学びとは、自分で調べることだと思えます。ある意味、先生に教わるよりも、知りたいと思ってネットで検索するほうが価値があるかもしれません。タブレットは検索ツールとして便利ならうえ、学習アプリも利用できます。」

自分の夢や目標、前向きなチャレンジをコトバにして宣言しよう!

DO.PROJECT



lenovo. FOR THOSE WHO DO.

大胆な夢に挑む人たちに、テクノロジーの力で応援するLenovo「DO.PROJECT」。やり遂げたいDO(夢や目標)をホームページに書き込んでプロジェクトに参加しよう。

<http://lenovo-do.jp/nba>

協力：レノボ・ジャパン株式会社 <http://www.lenovo.com/jp/>

今村 久美 氏

慶應義塾大学環境情報学部
在学中からカタリバの活動を
開始。2006年、特定非営利
活動法人 NPOカタリバを創
設し、代表理事に就任。2008
年、日経ウーマン「ウーマン・
オブ・ザ・イヤー」受賞。

PROFILE

「IdeaPad Tablet K1」の快適な操作性に驚く今村氏。「このタブレットは、被災地の子どもたちの知的好奇心に応えて、学習意欲を高めてくれそう」と話す。

特定非営利活動法人 NPOカタリバ

キャストと呼ばれる現役大学生スタッフによる高校生のキャリア学習支援を中心に、大学や企業などでも教育事業や研修事業を展開中。現在、キャストとして約4500名の大学生が登録している。今年は東北復興事業をスタートさせた。



<http://www.katariba.net/>

自分の未来をイメージできない若者たちをサポート 次世代の担い手を応援するチャレンジは、被災地へ

大学生と高校生が本音で語り合うというユニークな方法で、キャリア学習支援を行っているのが特定非営利活動法人 NPOカタリバ。その創設者であり、代表を務める今村久美氏は、新たな目標に向けて動き出した。

特定非営利活動法人 NPO「カタリバ」が高校生を対象に実施するキャリア学習授業に、先生はいない。少人数のグループの中にキャストと呼ばれる大学生が加わり、自分のことを語り出す。先生と生徒、大人と子どもというタテの関係でもなければ、生徒と生徒というヨコの関係でもない。ちょっとした上の先輩と後輩という。ナメの関係。生み出すマジックがここで生まれる。聞く一方だった高校生は次第に一人一人と語り始め、いつのまにかグループ全体がリラックスした空気の中で、本音トークを展開し始める。

代表の今村氏は「今の高校生が無気力だと言われるのには、学校が社会と切り離されていることに大きな原因が

あるのでは？」と気づいた。「自分と近い、でも大人である先輩の話や聞くことで、ちょっと先の自分の姿をイメージすることができず、そして、それによって今日を一生懸命に生きるということができない」と今村氏。カタリバの狙いはスバリの申し込。

「経済状況が変わり、安定した就職先が存在しなくなった現在はい、いい会社に入ることも、社会に出てから遭遇するさまざまなトラブルをいかに乗り越えられるかが大切です。学校では培えない、そんな底力を育む手助けになりたい。カタリバにはそんな思いも込められています。」

信じがたい大震災というトラブルが発生した今年、今村氏はカタリバのノウハウを生かして、被災地に暮らす若者たちを応援しよう、宮城県女川町で新規事業を立ち上げた。使われなくなった小学校を利用して設立した「コラボ・スクール」の女川向学館だ。

「カタリバでやってきたのは、学校という活用できない環境がありながら自分で動機づけできない生徒をサポートすることでした。しかし、女川の生徒は従来の学校や学習塾、自宅での居場所など、環境自体を失ってしまった子どもたち。そんな小学校から高校までの子どもたちが自由に過ごせる放課後学校として始めたのが「コラボ・スクール」です。」

困難を乗り越える力を 培える場をつくりたい

直感的に操作できて、レスポンスが早い。自分に合わせて反復学習ができるなど、学習にはとても有効なアイテムですね。

スクールは寄付によって運営されており、約1万5000円の寄付で子ども1人が1カ月通うことができる。資金的には厳しいが、このような学校を少しずつ増やしていきたい卒業生から被災地の未来を切り拓く起業家が生まれてほしいと今村氏は考えている。

カタリバは独自のメソッドが全国に浸透し、各地に活動拠点が誕生している。遠距離のスタッフ間のやりとりには、タブレットなどのビデオ通話は欠かせない存在。「カタリバ」を持つことの重要性、そこから広がる可能性を実感する機会が、日に日に増えていると今村氏は感じている。